孫會員伝志

洛陽 市郎

へ遠13
2475
42

へ13
2475
42

大坂本屋

参考機関

一

一

目録

武家官位の事

并 官位の名称と唐名の事

官書三位以上の名称不系の事

并 官職と官位の事

はんやのみ
うてよ

帳

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

御躾とともに元服のしるしなり
豆州へ下りし頼朝嫡子
兼時和尚の命を蒙つて藤原泰衡
らく静御子にみしびしうらも牧の方の
息子武蔵守朝政と悴筆子せん
よのし手代九郎か白状せしへつき
謀叛の隠もまいらせ足し深秘して
と評定ありて朝政五京なりけるもや

うちとつて悪徳の御家へむかひ
朝政を謀もよさ命じのふ并伊日
のみうき磯累ほうちておかずしく去
目座手かて京入して作とホ本多信
浮を郎るを源三位の尉観長左衛
北条の尉基清二条利安有紀とる子
上三人をほげる是子ちとく聖本六日
北とまかく朝政が二郎和六角東の御院

に利義満公と申奉るところに
今日相模入道殿の御前にて
宿老たちもみな相模殿おぼしめして
しが新田四郎義貞の勲功をかんじて
仰せけるは相模殿をいかにもとして
御当家相模殿よりも高くなる
よりさきの法を立て替へ先祖の家
まで作られて豪を取り恐れて御勘気を賜

し給ふ上は御代の能仕を見
の御恩を小身のものまで御みよ
はいよいよ重じて一下の所
御人々に将軍の御勘
功の御事をまつて申すにつけ
御つけ給ひもろもろ直人御所
若きけるに上命の
殿に参り相模まいる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

まづ元来伊勢の国は山田の
新保といふところにかくれなき京家伊勢
平氏の残党おこりし頼朝をせめみだし
逆臣大将軍にて山田小次郎強よ
忍ありて既にかなはずして一族を
しく江州一円みちみちて謀反を
逆臣伊勢の者朝敵一命をすてける
者一類伊勢国に籠りまもるのとき

山田小次郎も朝敵にくみしたる銭を
されば伊勢平氏に加はる騎兵利
謀りて討死まして逃しも
乱れて平家もしく朝敵を
籠城して其のしびの事あの
前には伊勢の国の新保城伊勢
伊ちやうとして一門
今は山田小次郎逆臣に仰し

西とも號しける案牘篇のいとゝも
みるし奇傳ハ例の先ぞや〱せうの
數段を讀得して玉簾ぞとおもふ
が縁のけりる一頭もおもしろく逃過く
まち編をおもしろく嫁ぢ佗の故
卯をもとめて経ぞとおもしりる也
門い奇傳を百てまて卵殻子傳
ら兼しおもし是錦のかくの豐着う

しなて行絵の挑ひのまさしくる今
改途色せしかつき鐘鏡鐵切との〳〵
て再発は塑別を新傳せんまうと戯字
しらと一妙味の〳〵一拵玉鬼が身体
いんがうまえのごく〱奇傳の補とく
まるれぞ佩衡鈍眉をえくさて悦
ゞ見退らおし概まき藤窓はい討
改浪席して第四みをかくもしまると

詳らかしくハ木印手跡を記し
たり、悪行ハ外戚をもつてしても將軍
家を討ことなりかたくてもつて謀叛人となり
其後の時先難胡元は倶にうばぞ
人でもあるまとのうしなはれ
た太刀の時節をうかゞふる石蘭命の
ゆ何法もおとされも卑しきぞと
此子孫居信思し召し

こゝに於てくつせさきみるべし罪を犯し
して幸とする人々天地にむかふ
ともしは道始之人の始之此金頭
金台の外戚としても謀叛の者へ
ゆりして鬼神難すまして積ともる
と幸自ハ事実子釈すゝむかな
北条一家を滅さんとのこゝろ
まことに実の逆臣なりけるとて金台

の新宮に見とさ[illegible]
[illegible]合らよ叶ふ[illegible]と新宮せんと[illegible]
るなる古歌の[illegible]
[illegible]祝みの[illegible]
[illegible]人倫の[illegible]
[illegible]て歌を[illegible]
[illegible]清輝[illegible]
[illegible]

十[illegible]の長[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

蜿蜒としてゑんゑんよりおんみだれ
憔悴衰へて父と母となりておやを
哀れみを慈しむ事あれは奈良の都の
しきりと鹿をとりしよりた先生て
あらば深き池のしきみんぞみと津々
る君の傍らに有たる武者のちくさん
なる文のふみと浦辺に聞て行
の様を尋ぬる友智顔と深きの事

かゝる事をあはれと思ひしるもの
たゞ一筋の情をおもひしる物也
去りし老王の助る事ありと志と表
落とさんと馬を走らせて捕りまひら
に浪しくる山の辺に今様
の侍りとかくしつゝみだれぬる様を見
らんとてはかなき風の手すさびに
の情感はしもありけるへ此事一家

の音調とゝのへたる後にむけてみる
まし風の芭蕉葉にして尻居の一節
成とこそひしるこゝろかるすしける
けるまかゝいほとしくみ頬ぎ
らんや鹿兒野はのへしつみてと
おかしいふよとれらし吾かの巫女
けふ泄りれ鹿兒も音はか太秋は
くんと鹿はよおよひ秋頃へし

堅気の後鹿兒とぞ茶をゝもひかる
猶華清霜にましゝ母ゝの小紙
らひよろても身とつくまゆくてまく
まゝ是にまし色ゝからにをしてみ見紙
うちよくらん当時見をほゝく一然て
弟子をうつらみ母しもまた鹿およひ
こだといふかしくかくるゝ体つけ
物君のまつてまてんとゝなるに弟子

[illegible]の[illegible]して[illegible]の[illegible]剣の
[illegible]して一[illegible]花のの[illegible]より
[illegible]の[illegible]天のの[illegible]
て[illegible]の[illegible]とりて[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]長[illegible]
く[illegible]又[illegible]
[illegible]と[illegible]の[illegible]と

[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

遠所なれども打こえくみつきたるなり
ひ移りしる世のならひ鎌倉繁昌
に似ずといへども大将軍の御代より
上総のかみよしたけて奢をきはむる
の家人千葉三浦和田畠山すべて
心をくだき君にはひぬはなし頭をそろへ
鎌倉殿の御政道よく民もいまにしのぶ
ましも見たてまつり忍しわたして鎌倉殿

一月夜と唱へつる花の盛のふたし
に右大将義朝の後十年をへ続かる
権しの家をつゞて執権北条の命
さゑくに三浦命をまもりし老臣のぜん
と千葉三浦のさまゐに高代しうく
そのしを云けなれば讒言にまぬよる
年有て四海を観音をとりかひ時後
据て君を守もんと計りうしみまる

死し牧の方ハ自害してはてられけれバ
いくども上意にしたがひてくらさる事
世上静かになりしハ執権を治し
まことハ前代の北條時政一子時
ましく右大将の御代よりあらたなれハ
権臣をもつて政事をまかせられ
法令かつてしきじきにたゞしく北條
師有つて四海泰平の世なり

られし女ハ女房の北の方の娘の
御そてのおやの娘にてありけんや
其名をとするひ事件一家の子として
よつて将軍いかにとも覚ゆるく家
くらも皆北条の権威にかたぶかり
まるまかなしくらバあしきに
はりぬる権臣ハ時の威風に力を
く自然ともてなさる姫君

法を恐れ罪をおかし権威に立
いつと遁避抑へとまつて無事を術
つし新とのがれとまつぐ静かにぞ
残す五年もくれて速に久元年まで
あらしまろ、二年の十月廿六日済元有
て義元と改る同年八月十二日露ケ
岩の八幡宮発生会庭所よりて
将軍は参議となりて随意のしまうい

前摩守子是を命じめててころの新
参議のはめのらんで随意の、子不
年のしまがしいと天保大の行列
得てわらのにの事はしきとへ不参
のにまぞにいてて陪臣いぞうでちる子
あてく前摩守子命じのつて翌日の不
参ととして陪将軍子もとびさり
は新参の公家夜前子命じのの不ところ

かゝるの不義と相しらるゝ
や将軍家の御威勢
うるはしかりし御名誉
ゆゑ御家の衰微と
ゆゑ是とても右衛門の
かゝる不の情義
なく面目将軍家を
不義とす一ツ御
き情義とるの

[illegible]と[illegible]下[illegible]
よりて[illegible]
[illegible]人の[illegible]
[illegible]
の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]